「博士論文」合否査定資料

申請者
職・氏名　　増谷　有佳

学位の名称　　博士（英語英文学）

論文名　Perspectives and Strategies Related to Foreign Language Anxiety in the Classroom: How Can Learners and Teachers Alleviate FLA in Japan?

審査委員　　主　査　　若本　夏美

副　査　　飯田　　毅

副　査　　今井　由美子

審査結果　　合

2023.2.10　英語英文学専攻博士後期課程委員会　承認
2023.2.10　文学研究科博士後期課程委員会　承認

博士学位論文審査結果報告書

2023 年 2 月 6 日

学位申請者	増谷 有佳	
審査委員	主査	若本 夏美 印
	副査	飯田 毅 印
	副査	今井 由美子 印

本学大学院生の増谷有佳から「Perspectives and Strategies Related to Foreign Language Anxiety in the Classroom: How Can Learners and Teachers Alleviate FLA in Japan?」という論文名で、博士の学位申請があった。論文はＡ４用紙、英文１４０枚の力作である。これを受けて会議を開催し、主査・若本、副査・飯田、副査・今井の三名で審査にあたることになった。

まず申請に必要な条件（査読付き学会誌掲載など）は「LET（外国語教育メディア学会）関西支部研究集録」に論文が掲載されており、その他にも単著の論文２本、JALT２０１８などの学会における口頭発表が計３本あることで基準を十分満たしていることを確認した。その上で、２月６日に公開の口頭試問会を開催し、各委員との忌憚のない質疑応答が行われたことを報告しておく。

申請論文は７章から構成されている。それを大別するなら、前半は英語学習者を対象とした外国語学習不安に関する量的研究であり、探索的因子分析および分散分析といった統計手法により英語運用能力の習熟度にかかわらず学習者が経験する第１因子と学習の継続により軽減させることが可能な第４因子が存在することを明らかにしている。

後半は英語教員を対象とした教室内外国語学習不安に関する質的研究であり、学習者の不安を引き起こす要因が心理的・言語的要因が交錯する複合的問題であり、それらに対する教員からの方策について議論している。

以上、増谷の論文は、量的研究と質的研究を組み合わせ、英語学習者と英語教員という両面からという従来にない視点を組み合わせた研究であり、高く評価される。外国語学習不安の原因を明らかにするだけでなく、それに対する説得力をもった方策を提言している。審査委員は全員一致で増谷有佳の申請論文にたいして、博士（英語英文学）の学位を授与するに値するものと認定した。今後なるべく早くこの成果を研究書として出版してもらいたい。

博士学位論文審査結果要旨

2023 年 2 月 6 日

学位申請者	増谷 有佳	
審査委員	主査	若本 夏美 印
	副査	飯田 毅 印
	副査	今井 由美子 印

論文題名

Perspectives and Strategies Related to Foreign Language Anxiety in the Classroom: How Can Learners and Teachers Alleviate FLA in Japan?

（要旨）

増谷有佳は、博士課程前期（修士）を立命館大学大学院言語教育情報研究科において言語教育情報学専攻で修得し、その間、高等学校の非常勤講師として英語を教えた。これらの経験より、応用言語学により興味をいだき、特に英語学習者の外国語不安（Foreign Language Anxiety, 以下 FLA）の研究を志すに至っている。

居住国を問わずグローバル課題への取り組みが求められている中、高い英語運用能力獲得が課題達成のための一つの方略であるが、外国語学習環境下にある日本では日常生活で英語を使用する必要性が低く、その反面教室内で近年求められる英語でのコミュニケーションに不安を感じる英語学習者が多い。そのため、このような英語を話すことに対する不安を軽減することは喫緊の課題であるが、これまで FLA に関する研究集積は十分とは言えない状況であった。

増谷はこの FLA 研究が２１世紀の英語教育に不可欠であると考え、日本人英語学習者及び日本で教鞭を取る英語のネイティブスピーカー教員ならびに日本人英語教員を対象とした量的・質的研究をおこなっている。ともすると量的研究に傾きがちな研究に、質的データ解析結果を加えることにより、広範かつ綿密、詳細な議論を展開している点が評価できる。

また、FLA の問題を学習者と教員という両面から考察している点、また問題点の列挙に留まらず、FLA の解決策についても精緻なデータ分析結果をもとに議論している点も評価できるところである。

増谷が議論しているように FLA の問題は学習者の英語運用能力が向上するだけでは解決しない日本の文化要因が介入する複合的問題である。故に、増谷が主張するように学習者、教員が取り組む事が可能な側面にそれぞれ英知を傾けながら、教室文化の変容のために学習者と教員の協働作業が必要となるのであろう。

増谷が議論の中で解決のための方策はそれぞれが動的かつ相互に関連していることを示している点も見逃すことができない。もちろん、増谷が例示するように IT 機器の活用やより効果的なタスクの創造は重要である。しかし、それ以上に重みを増すのは彼女が主張するように、教員との協働作業を通して学習者が成長マインドセットを獲得することであると思う。そのような新たな心的枠組みによって FLA を克服し、より高度で質の高い英語能力の獲得につながるのであろう。その意味では増谷は１０年後、２０年後を見通した議論をしているのかもしれない。

なお、本論文の中では国際語としての英語についての言及もなされている。日本人が教育機関を卒業した後に実際に英語でコミュニケーションするパートナーはネイティブスピーカー以外であることが圧倒的に多く、今後その傾向は加速するものと考えられる。この視点を組み込んだ点も本論の価値を高める要因となっている。

以上により、審査員全員一致で本論文を博士論文に値するものと認定する。今後なるべく早くこの成果を研究書として公刊してもらいたい。

博 士 学 位 論 文 内 容 要 旨

2023 年 2 月 6 日

学 位 申 請 者	増 谷 有 佳	
審 査 委 員	主 査	若 本 夏 美 印
	副 査	飯 田 毅 印
	副 査	今 井 由 美 子 印

（ 要 旨 ）

本学大学院生の増谷有佳から提出された学位申請論文「Perspectives and Strategies Related to Foreign Language Anxiety in the Classroom: How Can Learners and Teachers Alleviate FLA in Japan?」（A 4 用紙 140 枚、計 13 点の図表を含む）は、以下の構成（目次）となっている。

Chapter 1　Introduction（論文全体の紹介、各章構成の説明）
Chapter 2　Literature Review（特に、English as a Foreign Language[以下 EFL]環境下における研究を中心に外国語学習不安についての先行研究及び研究課題の提示）
Chapter 3　Research Design for Study I and II（論文全体の研究デザイン，量的研究と質的研究の重要性とその手法についての記述）
Chapter 4　Study I（高等学校・大学生学習者 338 名を対象にした量的データ研究）
Chapter 5　Study II（高等学校・大学 37 名英語教員を対象にした質的データ研究）
Chapter 6　Discussion（Study I & II における知見をもとにした研究課題の議論）
Chapter 7　Conclusion（結論、研究の限界及び教育研究に対する示唆）
References（参考文献）
Appendices（研究に用いた質問紙や同意書などの資料）

タイトルが示す通り、本論文は日本人英語学習者が教室内で感じる外国語不安（Foreign Language Anxiety, 以下 FLA）について、学習者と教員の双方の立場から考察したものである。外国語として英語を学ぶ（EFL）日本人学習者が教室内でどのような種類の不安を経験するか、また教員は学習者の不安にどのように対処しているかを明らかにした上で、FLA を軽減させるために学習者と教員がとるべき方策について議論することを目的としている。

Chapter 1 では人々が居住国を問わずグローバル課題への取り組みが求められている中、高い英語能力獲得が課題達成の一つの方略であることを示しながら、EFL 環境下の日常生活で英語をあまり使用しない日本人にとって英語を話すことに対する不安が高度な英語能力伸長の障壁となっていることを述べている。

Chapter 2 では FLA の定義を提示し、その後、先行研究に依拠しながら、FLA に影響を与え得る要因について、心理的問題、言語的問題、教室文化、教員に起因する問題、学習者に起因する諸問題に分類しながら、また FLA の負の側面だけでなく英語を話すことに対する促進的効果について、教員・学習者が取り得る FLA 軽減方略について的確に整理している。その中で、EFL 環境下にある日本の英語授業内における外国語学習不安軽減の方策研究が不足していることを指摘し、この点に関する研究の重要性・必要性を提示している（全体を通しての研究課題）。先行研究に関し、特に日本と同様の EFL 環境下の研究を数多く含めている点が後の効果的な議論の一助となっている点を付記しておきたい。

Chapter 3 では応用言語学における研究手法を外観しながら、量的・質的データ両方を組み合わせる事の重要性（Triangulation）を指摘し、量的研究である Study I（Chapter 4）および Study II（Chapter 5）の概略を提示している。

Chapter 4 では先行研究をもとに精緻化された 45 項目からなる質問紙を用いて実施した調査研究について記述している。探索的因子分析（Exploratory Factor Analysis）により、授業中英語で発言することや教員の質問に英語で返答することに関する不安（第 1 因子）、英語学習に対する興味及び動機（第 2 因子）、英語の授業に関する一般的なプレッシャー（第 3 因子）、英語母語話者教員と英語で話すことに関する不安（第 4 因子）という 4 因子を抽出し、分散分析（analysis of variance）により英語運用能力の習熟度にかかわらず学習者が経験する FLA（第 1 因子）と学習の継続により軽減させることが可能な FLA（第 4 因子）が存在することを明らかにした。

Chapter 5 では日本の高等学校と大学の英語教員を対象に、学習者の教室内における FLA 軽減のための方策について、計 21 項目で構成される主として自由記述式質問紙を用いた質的調査研究について記述している。学習者の不安は沈黙、教員とのアイコンタクト回避、日本語使用などの現象として現れ、学習者の不安を引き起こす要因に関しては心理的・言語的問題が複合的に交錯しており、他者の前で目立つことを恐れる日本人学習者特有の文化的要因の影響も含まれていると教員が認識していることが解明された。また、このような複雑な学習者の不安に対処するために、心理的・言語的支援、授業内活動の多様化といった教室内活動にとどまらず、教室外でも積極的にコミュニケーションを図り、学習者との信頼関係を構築する重要性を明示している。

Chapter 6 ではこれまでの議論を受け、FLA を軽減するために学習者の責務として自主学習と共同学習のバランス、適切な学習目標設定、学習管理、学習計画修正、また自分自身を信頼することに加え他の学習者や教員を信頼することの重要性が、教員の責務と

して自らの外国語学習経験や指導経験に基づき、学習者の情意面に共感することや各学習者に応じた方略を提案すべきことを示している。また、教員と学習者は互いに協力してFLAを軽減するような教室環境の創造の必要性を議論している。

Chapter 7ではこれまで明らかになったことを結論として整理し、研究の問題点、特に高校や大学以外の英語学習者への適応への問題を含んでいる点を研究の限界として述べている。また、今後の研究や教育への示唆として、学習者の不安のレベルをゼロにすることは不可能でも、好循環を産み出すために、学習者と教員が取り得る方策を動的に組み合わせることの重要性と今後その重要性が増すと考えられる、国際語としての英語という観点を教員も学習者も持つ必要性を示している。

本論はその重要性は認識されながらも研究の集積が十分ではなかった日本人英語学習者の外国語不安に関し、量的・質的データを駆使してその原因と方策を明快に示している。どの章にも増谷独自の重要な知見が提起されており、今後の外国語不安研究に対してだけでなく、英語を話すことの重要性は認識しながらも不安をいだく学習者、またそのような学習者を教える教員に光明をもたらすものである。よって、本論文は博士の学位に値するものと認められる。今後のさらなる研究の進展を期待したい。

試 問 結 果 の 要 旨

2023 年 2 月 6 日

学 位 申 請 者	増 谷 有 佳	
審 査 委 員	主 査	若 本 夏 美 印
	副 査	飯 田 毅 印
	副 査	今 井 由 美 子 印

（ 要 旨 ）

本学大学院生の増谷有佳から「Perspectives and Strategies Related to Foreign Language Anxiety in the Classroom: How Can Learners and Teachers Alleviate FLA in Japan?」という論文名で、博士の学位申請があった。これを受けて会議で審査委員が選出され、主査・若本夏美、副査・飯田毅、副査・今井由美子の三名で厳正に審査にあたった。

各委員には事前に申請論文の複写物が渡され、余裕をもって査読した後、２月６日に本学で公開の口頭試問会を開催した。その席上、申請者に対して論文内容の確認、ならびに各委員による忌憚のない質疑応答が６０分余り行われた。各委員からの専門的な質問に対して、申請者は一つ一つ丁寧かつ適切に応答していた。この口頭試問を通して、申請者の学力・人物とも申し分ないことが確認できた。

申請論文については、外国語学習不安をテーマに、綿密な先行研究の精査の上に、日本人英語学習者及び日本で教鞭を取る英語のネイティブスピーカー教員、ならびに日本人英語教員を対象とした量的・質的研究を組み合わせ、統計手法も駆使しながら、外国語学習不安の原因を抽出し、それに対する対策を明快に提示することに成功している。

居住国を問わずグローバル課題への取り組みが求められている中、高い英語運用能力獲得が課題達成のための一つの方略であるが、外国語学習環境下にある日本では日常生活で英語を使用する必要性が低く、その反面教室内で近年求められる英語でのコミュニケーションに不安を感じる英語学習者が数多く存在する。増谷の研究はそのような学習者だけでなく教育にあたる英語教員にも大きな福音となるものである。

試問を通して申請論文がオリジナリティにあふれ、これまでの外国語学習不安研究にひとつの重要な知見を積み重ねるものであることを確認した。よって審査委員は全員一致で増谷有佳の申請論文に対して博士（英語英文学）の学位を授与することを決定した。